



蔣繪師傳

上

特別  
イ 4  
3159  
B69 (1)





14  
3159  
B69(1)



薛繪師傳

目錄

卷上

幸阿弥道長

同宗金

同宗伯

同長晏

同長法

同長房

卷中

同道清

同宗正

同長清

同長善

同長重

同長叔

卷上



2

一文  
一

此間  
一行  
アキ

3  
蔣繪師傳卷上

4  
厘心飯島半十郎 著

我が國蔣繪の業ハ傳へて甚古、現ニ古代の蔣繪の今ニ存するもの亦尠くも然きも其の工人の姓名たゞハ事跡の詳ならずハ世人の常識憾とす、所ナリ、今諸書を採ル、古老ニ尋ね、僅ニ豆利氏以降、此の工業ニ熟達せし者、数十名の事跡を知ると得とす、ハ、因陋と顧ミ、モ、し、ハ、傳と作ふ、

此間  
一行  
ニ

五十嵐信齋  
同 太兵衛  
同 休伯  
春正景正  
木阿弥光悦

同 道甫  
古満休意  
山本春正  
梶川久次郎  
尾形光琳



サハ子

家の祖なり、

按る、幸阿弥系圖、道長の蔭繪ハ高蔭繪ハ光  
 信、研き出しハ能相の下画なりと載せありしと、  
 其の何の器具ハ蔭繪せしハ又何の画様なり  
 今詳ならず本朝画史扶桑画人傳等ハ光信  
 ハ蔭繪の下画を画きハたと載せありハ其の  
 画きハ明りして且つ多く画きハ存らん  
 従ひて道長の蔭繪せし器具亦妙ならずハ  
 一ハの高尚優美なる足利時代蔭繪と稱す  
 高蔭繪ハ即光信の下画道長等の蔭繪なり

ルハ子

幸阿弥道長一世

幸阿弥道長ハ土岐氏四郎左衛門と稱し入道  
 幸阿弥と稱し子孫ハの稱とすハ氏と名應  
 永十七年、生色長して足利義政公ハ仕へ近習  
 となり近江國栗本郡ニ移り小知と賜ひ京師  
 住し細工き蔭繪を仕習ふ細工の名手なり  
 幸阿弥系圖ハ細工の類あり蓋ハ其の  
 名ハ徳川氏の細工の類なり蓋ハ其の  
 蔭繪ハ大抵高蔭繪の下画ハ土佐光信  
 より出りハ能阿弥相阿弥の下画なりといふ文明  
 十年十月十三日死す年七十一、是れ實ニ幸阿弥



後世本武の高蔭繪と稱すもの、皆此の画  
法採術に據らざるを、土佐光信ハ、廣周の子  
として、繪所預けたり、從四位下を叙せし刑  
部大輔と稱す、画法超凡、最山水人物に長ず、  
大永五年死、能阿弥名ハ、真能、鷗齋又春鷗齋  
と号す、是利義政公に仕へ、同明より、書画を善  
く、一か劍の鑑定に精しく、且つ點茶を善く、  
和歌を善く、又庭造の術に長せり、画法ハ、牧  
溪を慕ひ、周文を學ひ、筆力生軟、山水人物に亦  
一種の氣韻あり、相阿弥ハ、真藝の子、能阿弥の

4

孫なり、名ハ真相、監岳、又松雪齋と号す、能阿弥  
と同しく、義政公の同明より、亦書画を善く、  
和歌を善く、點茶庭造に長せり、画法ハ、周文  
を學ひ、牧溪の筆意に據り、頗る風韻あり、  
本朝画史、扶桑画相の筆一説に、能相の蔭繪下畫ハ、  
人傳等、詳なり、  
研究出する限り、宋の画法を用ゐて蔭繪の下  
畫をなさん、但、宋之の画法を用ゐて蔭繪の下  
畫をなさん、能相下と其の始めたり、  
以前の器具より、宋之の画法を用ゐて蔭繪  
せしを見ざるなり、又一説に、高蔭繪の製ハ、



此の頃より始まる一なるん是利氏以前の蔭繪より、おれい見ると、

又按、幸阿弥ハもと氏ニあらも道長入道一  
ての稱なり、世人呼びて幸阿弥々々々といひ  
るより、後より土岐氏と稱せしむ、幸阿弥を  
氏ともし、至りたりんかの土佐家も藤  
姓より、春日氏なり、世々土佐守に任せら  
るゝも、世人土佐々々と呼び、終り氏とな  
せし類なり、幸阿弥系圖、幸阿弥と氏と  
せし年月を載せよ、い今詳ならず、さきとも、子

孫六の稱を以て氏ともいへ、道長より一  
二世の後なり、

4 同道清二世

同道清ハ道長の長子なり、永享四年に生れ、藤  
左衛門と稱し、入道して法橋と叙せり、寛正六  
年、是利義政公の命を奉り、後土御門天皇御即位  
の御調度、蔭繪せり、細工上手なり、能相土佐  
の下繪を用ひ、多し、又善く画くとも、後より、  
自下繪をかき、蔭繪の一風を製出せり、常鼓の胴  
は蔭繪して、義政公に奉り、公大に其の技を賞し、

八

ワ  
ハ



半夜の硯箱を賜ふ、明應九年十月三日死す、年六十、

一  
如  
字

按、幸阿弥系圖、道清蒔繪の一風を製出せし由あり、又道長の製と異なり、一種の蒔繪を製せしものなり、其の製今詳ならず、又鼓の胴は蒔繪せし由あり、其の画様亦詳ならず、

又按、道清の製品ハ幸系圖阿弥の二字を異に以下ありし、做

鼓の胴、是利義政公に奉る、

後土御門天皇御即位之御道具、

同宗金三世

同宗金ハ道清の子なり、長祿元年、生ふ、俗稱詳ならず、後、法橋に叙せらる、明應年間、是利義澄公の命を奉り、後柏原天皇御即位の御制度を蒔繪せり、當時兵乱御即位の期後、大永元年三月、武を行はる、同七年十月十三日死す、年七十一、

一  
如  
字

二  
如  
字

按、宗金の製品ハ幸系圖、後柏原天皇御即位之御道具、同宗正四世



同宗正八、宗全の長子なり、佑稱彌三郎、文明十一年に生じ、天文廿三年十月三日死去、年七十六、

按、宗正宗全の後を継ぎ、蓋し蔭繪を製せしむらん、幸平國、其の製品を載せしむ、詳ぶらん、

同宗伯 五世

同宗伯ハ宗全の二子なり、文明十六年、生じ、佑稱辨をらむ、後、法橋に叙せしむ、享祿五年、管領細川高國の命を奉り、後奈良天皇御即位の御調度、蔭繪せし、弘治三年十月十三日死去、年七十

栗本宗清

五宗伯の弟宗清、伊賀守に任せしむ、栗本氏を稱し、蔭繪の一風を蔭せしむ、當時の名年と稱せしむ、

一之世

按、宗清栗本氏と稱せしむ、蓋し幸阿弥家の領地近江の栗本郡にありしを以て、栗本を氏とせしむ、ものたりん、明治廿六年六月、里川氏に漆工會の演説、畠將軍義政此の衰運を較圖し、て奈良栗本、幸阿弥、都筑榎本、圓阿弥、及五十嵐等、諸名家を舉ぎ、遂に東山蔭繪の隆盛を見しむ、至し云々、按、義政公の頃、未だ栗本氏あり

7



らさしなり、幸草圖を因もく、栗本ハ幸阿弥  
の別家より、宗伯の弟宗清、始めて栗本を稱  
せしなり、宗清ハ生年の詳ならず、其の父の  
宗伯ハ文明十六年生じ、其の間隔つた  
義政ハ延徳二年に薨じ、其の間隔つた  
おと六年、おきよより考ふに、義政ハの時  
未と栗本ハありさし、おと推し、知人、其  
ハ、都筑、校本、宗良とも、此の頃既にあり  
し、甚疑ふ、  
又按、宗伯の製品ハ幸草圖ハ

後奈良天皇御即位之御道具、

同長清ハ

同長清ハ宗伯の長子なり、永正三年に生じ、四郎  
左衛門と稱し、入道し、法橋と叙せし、永禄三  
年正月、足利義輝公の命を奉り、正親町天皇御即  
位の御調度ハ、蔭繪せり、天正年間禁中の御調  
度ハ、蔭繪して、天下一の珍と賜ひ、此の時、豊臣  
秀吉公より下さき、朱印ハ、證文左の如し、

朱印写

禁中兵院御所蔭繪道具申付候同無異

8

7  
9



議仕立可申者也

天正十一年癸未三月十五日 秀吉

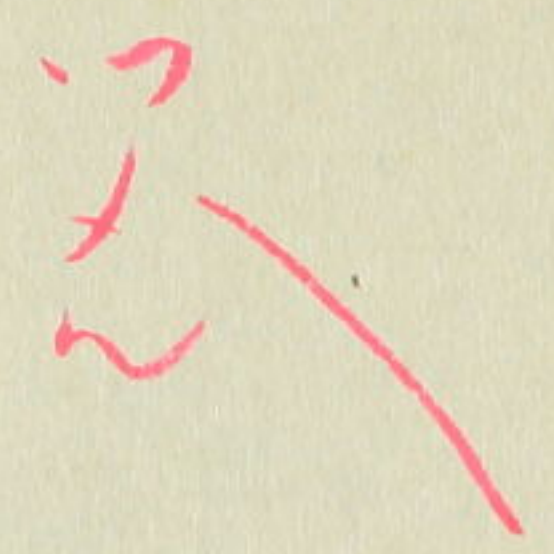
天下一幸阿弥長清

證文

今度禁裏兵院御所之蔭繪御道具幸阿  
弥長清、被仰付候間長清申次第、考  
御可申候作料之儀者有様、取可申者  
也

天正十一年癸未三月十五日

彈正少弼 上下宗蔭繪屋中



長清北條氏直に寵せらるゝ又徳川家康公にも愛  
せらるゝ、常々小田原三河大坂の間を往来  
して蔭繪をたも、慶長八年四月廿六日死す、年七  
十五、小田原あり、一時一子を設く、某とす、某  
後、北條氏に仕へ、叔父宗清の後を承る、栗本幸  
阿弥と稱す、小田原落城の後、徳川家康公に仕ふ、  
其日即世、徳川氏の蔭繪師となり、栗本太郎右  
衛門同源左衛門菱田甚右衛門等の祖なり、長清  
弟あり、彦五郎といふ、幸阿弥と氏とす、永喜と稱  
す、



除

一

按、古画備考、幸阿弥姓氏詳ならず幸阿弥  
 と稱す光源院義輝公の同明を、一、永祿年  
 中、公方家、奉、馬具の紋と画く、永祿四年  
 三月廿日、三好筑前守義長亭御成記云、進上御  
 鞍負信作御紋粒桐一、御鎧御紋番因なり、つ  
 べ切付御紋三ツ、黒漆幸阿弥繪之の、つ志  
 不、下黒漆、さうこ、口金手綱腹帯むらさきの  
 引兩一寸さうつ、つ、つ申之、志、つ、つ、つ  
 さき、つ、鞆手綱ハ白きを、其外鞍具如常と  
 つ、帯の緒紫と紅と一寸さう、つ、つ、箱ハ

10

ツ

不入候るりとあり、今年代をとり考ふは此  
 の幸阿弥ハ蓋し長清なり、一、浅岡氏ハ姓氏  
 詳ならずとのひ、又同明を、一、と、つ、あ  
 全、藤繪師の幸阿弥家と知らざるもの、如  
 し、  
 又按、長清の製品ハ、幸系圖、  
 正親町天皇御即位之御道具、  
 同長晏七世  
 同長晏ハ長清の長子として、永祿十二年、生、  
 久次郎と稱し、入道して法橋と叙せらる、長晏十



五歳の時、父長清と共に豊臣秀吉公の御前に出  
て、香盒へ梅と鶯の作画と有り、直に蔭繪して  
奉る公大に其の技を賞し、鶯のつらつらと言  
ひしとて、あまのなすの稱を得る、公又命  
して堀久太郎秀政の烏帽子子となり、久次郎と  
名つり、備前景光の一刀を賜ふ

按、堀久太郎秀政ハ藤原氏一、菅原氏美濃  
の入りて、初め織田氏に仕へ、二萬五千石に  
封せらる、後、豊臣氏に仕へ、軍功あり、越前  
に封せらる、二十九萬石餘を領せり、天正十八

陰

サ

年小田原の役、病にて死す、事ハ國史に詳し  
て、

天正十四年、秀吉公の命を奉り、後陽成天皇御即  
位の御綱度、蔭繪せり、慶長五年、関原の役、徳  
川家康公に見へ、扶持方十人分を賜ふ、祖先道長  
且利氏に仕へ、近江栗本郡、木まき、小知を賜ひ  
し、より以来、屢々知を増加せらる、六世長清の時  
に至りてハ、織田信長公より、更に伊勢の國某地  
を賜ひ、二百石を領せり、大坂落城の後、没収せ  
らる、此に至り、徳川氏より、更に扶持方を賜ひ



より同十五年、徳川秀忠公、長晏を江戸に召し、  
更ニ某地、たきし二百石を興へんとし、長晏召  
すきて京師と出て、東海道を下り、遠州見附驛  
に至りし、あやまちて馬より墮ちて死す時、  
十月廿五日、年四十二、長晏二弟あり、一と古藏と  
いひ、幸阿弥長玄と称す、一と徳次郎といひ、幸阿  
弥徳安と称す、共に蒔繪を善くし、長玄十九歳入  
道して、頗茶事と嗜し、茶家古田織部と交り、深  
く蒔織部の需、應し、厨子棚と蒔繪せり、上段ハ  
梅の古木、下段ハ三笑、戸前ハ茶垣の外香包の圖

りして施工絶妙と称せらる、世を以て織部棚と  
いふ、慶長十二年十月廿四日死す、年三十六、

按、古田織部ハ織部流茶道の祖と名ハ重  
然、俗稱左助、豊臣秀吉公に仕へ、織部正と称す、  
後、徳川家康公に仕へ、禄一萬石を賜ひし、  
叛心と抱き、をとりて死す、賜小幸ハ國史に詳  
たり、

其の子、清兵衛、幸阿弥良清と稱す、蒔繪を善くし、  
細川三齋の蒔繪師尾崎宗印6の養子となし、  
常禁中となき、土佐將監画、所の西行の繪巻

ゲサ



一入道して宗立又三齋と號し、正保二年十二  
 月死す、年八十二、性敏悟く、和歌を善くし、  
 武藝に長し、又工藝に精し、りきと事ハ國史  
 詳なり、  
 又按、幸草圖、土佐將監画し、所の西行の画  
 卷物あり、如何なる画卷なるや、本朝画圖品  
 目と関する、西行物語ハ四卷画ハ海田采女  
 相俣りして、西行記ハ一卷画ハ土佐純隆の筆  
 なり、良清ハ蓋し、あまの筆の画卷を見し、まの  
 なるん、

一廿

物を一見し、深く感をもつ所あり、おとよより更に山  
 水草木の圖を改め、一風の蒔繪を製出せり、其の  
 下繪ハ大抵生物を本とし、最黒粉を用ひ、あは  
 ち長き、蒔繪に黒粉を用ひ、あはち、實に良清  
 ともて始めたるなりと、小寛文五年十一月五日  
 死す、年六十九、

按、蒔繪師尾崎宗印の事、今詳ならず、細川三  
 齋ハ、幽齋藤孝の長子なり、名ハ、忠興、織田豊臣  
 二氏に歴事し、後、徳川氏に属し、厚軍功あり、  
 一ともて、四十萬石に封せり、元和二年致仕



八

又按、長晏の製品ハ幸系圖ハ

後陽成天皇御即位之御道具

前田利常侯の室御祇言之道具、濃部子地ハ

松橋之薛繪、慶長年間之作、

長玄の製品ハ同系圖ハ

織部棚、上段梅の古木下段三矢、戸前柴垣外

香包之圖

同長善ハ長晏の長子ナリ、天正十七年、生、俗

稱藤十郎、後、四郎左衛門トシ、慶長十六年正

月又ハ継ぎ、徳川氏ニ仕へ、扶持方ト賜ふ、  
如、同十七年、徳川秀忠公の命ト奉、後水尾  
天皇御即位の御調度ハ薛繪セリ、同十八年十月  
四日死、年二十五

共、按、長善の製品ハ幸系圖ハ  
後水尾天皇御即位之御道具

同長法 九世

同長法ハ長晏の次子ナリ、藤七郎ト稱、長善  
の弟ナリ、兄の後ト継ぎ、徳川氏ニ仕へ、扶持方ト  
賜ふ、如、慶長二十年、京福門院御入内

148

八



廿

の諸朝度の蔭繪を命せらるゝ元和元年桑名の姫  
君婚儀の諸朝度の蔭繪を命せらるゝ然るに其の  
蔭繪半ハなかりし何の故や世ト厭ハ佛門  
ヲ入ル元和四年十月十三日死年點詳ならず  
按ニ東福門院ハ徳川秀忠公の姫君和子ト  
シ後水尾天皇の中宮トシ桑名の姫君ハ出見  
又秀忠公の姫君トシ本多忠政の子忠刻の  
室ナリ  
又按ニ祖先道長十月十三日死ト三世宗金  
五世宗伯九世長法亦十月十三日死ト九世

15

15

の間ニ同月同日死セシもの四人ありハ甚疑  
ふトハおき蓋シ其の實ハ月日少ク異ナリ  
ト又月日の詳ナリキことを併せて祖先の忌  
日ト同一クセシものハ昔時諸家往々其の例  
あり  
按ニ長法の製品ハ幸楽園ニ  
東福門院御入内之道具  
桑名姫君御袂之道具  
4 同長重十世  
同長重ハ長晏の三男トシ、慶長四年ニ生リ新



次部と稱し、後、典兵衛と稱す、即長法の弟なり、  
早し出て、他家の養子となり、又長法世々  
厭ひ、薛繪と事とせさるゝとて、家へ歸り、後を継  
ぐ、元和四年九月扶持方を賜ふと舊の如し、同  
六年、足長法々製造中なり、東福門院御入内の  
諸調度、薛繪せり、其の調度ハ、今詳ならず、  
濃梨子地、枝菊の薛繪なり、寛永七年、徳  
川家光公の命と奉り、明正天皇御即位の御調度  
に薛繪せり、同年同公の命と奉り、掛硯、香箱、香奩  
に薛繪せり、掛硯、松と萬の画あり、下繪ハ、狩

野守信の筆なり、肉上高薛繪と製出、髹術巧妙  
と稱せらるゝ、其の後、前田執前守光高侯の室、婚  
儀の調度、薛繪せり、濃梨子地、画、様、仙人歌の  
文字、金銀彫物を、又近衛尚嗣公の室、女二宮、  
婚儀の調度、薛繪せり、濃梨子地、菊水水君の画  
様なり、又尾張中納言先友侯の室、千代姫君の婚  
儀の調度、薛繪せり、濃梨子地、画、様、八源  
氏初音の巻、年月を松とひらき、あし、人、  
小鶯の初音、き、せ、の歌の文字、金銀彫物、  
なり、



廿

按、初音の棚ハ尾州家の所蔵をもちし、如何  
なり故、や、其の中の一品、今我の博物館にあり  
也、初音の棚、附屬の品々ハ、厨子棚、黒棚、乱管香  
盆、銀魚甲斐紋散那、董物壺、六角董物壺、硯管、手  
筥、犬角赤、小角赤、色紙管、短冊管、渡、金管、長文  
管、揚枝管、沈管、鉄管、昆布管、小楯管の類あり  
し、其の中より入し、諸品ハ、一々掲ぐ、よ、暇  
あり、

正保元年、家光公の命と奉、後光明天皇御即位  
の御調度、は、蔀繪、又、東福門院の命と奉、日光

17

御門生<sup>主</sup>の座右の調度、は、蔀繪せ、濃梨子地、粒  
菊輪室の画様なり、又、二條光平公の室、女五宮婚  
儀の調度、は、蔀繪せ、濃梨子地、画様ハ、鶴  
菱の地紋、上紋粒菊散、此の時、蔀繪師梅原  
久音、工業と助なり、其の後、一條教輔公の室、  
婚儀の調度、は、蔀繪せ、画様、今詳ならず、又、松平  
新太郎光政侯の女、入城の時の調度、は、蔀繪せ  
也、画様ハ、地紋綾杉、獅子牡丹、なり、慶安四年二  
月廿一日、京師にありて、死す、年五十三、一弟あり、  
久次郎清久といふ、土佐の画を善く、早く



死せり

サシ

按、黒川氏の説、<sup>明治廿六年六月</sup>前畧芝増  
 上る、台徳院殿靈廟の宝塔ハ、人し知る八角  
 の塔なり、之ハ唐繪を蒔き、寛永七年より着手  
 して、偶肥前島原ノ動乱起りしともし、  
 同十四年十一月の頃幕府ハ右蒔繪の工事を  
 中止し、未だ全く竣工せしむ、同寺  
 の役日記ニ存し、其の蒔繪師の何人か、や  
 ハ明に知るを得ず、今も考ふに、此  
 の蒔繪ハ、かゝるも本阿弥長重なりしとせん

云々、本阿弥ハ本阿弥の誤る、一、幸草園と  
 関し、長重の製作せし蒔繪ハ、皆一々細工  
 記してあり、此の宝塔のあとハ載してあり、  
 ナリ、其ハ長重の製作して、あらさ、  
 同氏ハ何ヲ握りし、も長重なりしと  
 して、其疑ハ、此の頃徳川氏の蒔繪師  
 ハ、幸阿弥ノ外ニ、五十嵐圓阿弥、梅原小幡、榎本  
 の徒十有餘人あり、其ハ幸草園ハ、  
 又按、長重の製品ハ、幸草園ハ、



5.4

東福門院御入内之道具、濃梨子地、枝菊、

明正天皇御即位之御道具、

掛硯、家光公之御好、下画守信、唐松、葛肉、

上高蔭繪、

掛硯十炷香香盆、同公之御好、画様詳、

前田筑前守光高侯之室、御祝言之道具、濃梨

子地、仙人歌之文字、金銀彫物、

女二宮御祝言之道具、濃梨子地、菊水、若之

蔭繪、寛永十四年三月工成、

19

尾張中納言光友侯之室、代姫君御祝言之道

具、濃梨子地、源氏初音之卷、歌之文字、金銀

彫物、柿、胡蝶之卷之蔭繪、此道具、寛永十

四年より着手、三年の後、工全く成、

後光明天皇御即位之御道具、

日光御門主御手道具、濃梨子地、粒菊輪宝

其外色々、

二條光平公之室、女五宮御祝言之道具、濃梨

子地、鶴菱之地紋、粒菊散、梅原久音、此工と

助、



父死をうゝたふひ家と継ぐ扶持方を賜ふ事  
 舊のあとし、明暦二年徳川家綱公の命と奉り、後  
 西天皇御即位の御調度、蔭繪せり、寛文元年皇  
 居炎上、長房家綱公の命と奉り、天皇御座右の諸  
 御調度、濃梨子地、粒菊、唐草等と蔭繪  
 し、又皇后御座右の諸御調度、濃梨子地、粒菊、  
 唐草、枝菊、節菊等と蔭繪し、奉り、此の時梅原之  
 音工と助く、同二年二條光平公の姫君の婚儀の  
 調度、蔭繪せり、濃梨子地、亀甲崩し、内、種々  
 の紋上紋とトて、藤丸の蔭繪なり、又徳川綱吉

一條教輔公の室御祝言之道具  
 松平新太郎少将息女御入城之道具、地紋綾  
 杉獅子牡丹之蔭繪、梅原久音工と助く  
 家光公、日尖御社参兵御上洛之道具、  
 土井大炊頭利勝侯息女御祝言之道具、  
 松平伊豆守信綱侯息女御祝言之道具、  
 4 同長房十一世  
 同長房ハ長重の長子なり、俗稱典惣次郎、後、典  
 兵衛と改入道し、長安より小寛永五年に生れ却  
 りて父に従ひ、屢江戸京師に往来し、工と助く



公の御堂鷹司教平公の姫君々、入奥の諸調度、  
蔭繪より濃梨子地、桐唐草鳳凰上紋枝牡丹等  
なり、同三年家綱公の命を奉り、靈元天皇御即位  
の御調度、蔭繪せり、同五年九月京師あり幸  
阿弥家の邸宅火災、罹り世々賜はりし繪皆朱  
印より蔭繪の古器物等盡く焼失せり惜む  
し、同年近衛尚嗣公の姫君々婚儀の調度、蔭繪  
せり、濃梨子地、菊水岩の画、机石山寺  
の圖あり、同九年鷹司教平公の姫君々御入内の  
時の調度、蔭繪せり、濃梨子地、牡丹散、不

り、此の時蔭繪師五十嵐太兵衛八兵房、従ひ共  
に京師に赴き、蔭繪をなせり、同十年二月茶室木上  
以重病、蔭繪して禁中へ奉り、黒地に菊折枝の  
画様あり、同年甲府綱重侯の室より再婚の調度、  
蔭繪せり、地紋越中唐草上紋桐の平蔭繪なり、五  
十嵐太兵衛又此の工を助り、此の頃藤堂和泉守  
高久侯の依頼より、鶴亀松竹の蔭繪を製し、  
て其の調度今様なりとも、又松平讃岐守頼常侯の  
依頼より、格子織紋色々上繪の蔭繪を製し、  
て其の調度又詳なりとも、其の他水師美作守勝麿



侯の調度、唐松、梅の蒔繪、中川因幡守久道通侯の  
調度若松、鶴の蒔繪、土井能登守利彦侯の調度、  
格子織紋の蒔繪と掣しり、延宝三年長房入道  
として法射となり、長安と称し、同八年徳川家綱公  
の廟々東叡山に造營せり、此の時造營の奉行ハ、  
大久保加賀守、松平右近將監等なり、蒔繪ハ長安  
おとし、菱田久榮房貞、奈良ハ左衛門雪房、鈴木称  
左衛門正備、栗本太郎、右衛門光屋、同源、左衛門信  
親、榎本又右衛門實継、命せらる、廟扉四枚、濃梨  
子地、織紋色々の蒔繪となり、又勅額門天井板

久意  
休意

22

サハ

黒地、葵紋の蒔繪となり、梅原七郎右衛門重壽  
圓阿弥又五郎武宗、小幡七郎左衛門政次の三人、  
亦此の工業に従事なり、ちうう一廟内の蒔繪ハ、  
古満久意、専蘇枝を施せり、是見たり、さき、休意ハ、  
紅葉山の佛殿に蒔繪して、大に賞せらる、同年高  
蔵院殿の廟々東叡山に建つ、  
按、高蔵院殿ハ徳川家綱公の御堂なり、依  
見貞清親王の女、顯子なり、延宝四年八月五日  
薨り、東叡山に葬り、  
其の廟の蒔繪ハ長安おとし、菱田、奈良、栗本等九



此の年、長安更ニ徳川氏の命と奉卜宣命の箱を  
よひ、底輪心経の箱に、蔭繪せり、外ハ、燒金濃梨子  
地、紋葵丸畫、内ハ、小判濃梨子地、文字金粉蔭

幸阿弥長安

菱田甚右衛門房貞

奈良八郎左衛門雪膳

鈴木弥左衛門正備

栗本太郎左衛門光彦

栗本源左衛門信親

榎本又左衛門寛継

三  
字  
サ  
字

人ニ命せり、画様ハ、水、蓮、花、雲、廟  
前、花、雨、脚、梅、の古木、麻、油、煙、形、取、色、の  
画、又、柱、の、所々、濃、梨、子、地、織、紋、色、の、蔭  
繪、より、廟、後、の、製、造、者、の、姓、名、を、左、の、如、  
當、御、佛、殿、御、特、殿、及、御、廊、下、御、唐、門、御、水、屋、等  
以、五、米、漆、之、就、中、御、内、陣、乃、画、工、狩、野、養、朴、後  
書、之、漆、工、九、人、潤、色、之、就、是、記、其、姓、名、以、垂、不  
朽、云、

延宝九年辛酉五月

菱田源之丞成信

幸阿弥兵衛長好



除

サシ

繪有り、此の時、長安ハ、熨香机ニ脚、濃梨子地、蓮華唐草上紋葵丸蓋一の蒔繪一し奉り、梅原七郎右衛門重壽ハ、亦香臺ハ蒔繪一し奉り、此の諸朝度ハ、皆東叡山ニ納りあり、天和二年長安ホシ山田常嘉の二人、徳川氏の命を奉り、印籠香箱類ハ蒔繪も多し、此の年十一月廿四日死去、年五十六、

按、山田常嘉ハ、所繪師有り、此の頃常嘉の印籠ハ、世に行了、後、詳し、又按、長房の製流ハ、幸至國、

徳川家光公ハ、先御社参御旅道具、度安四年の作、  
 行幸之御道具、黒地ハ、越中唐草御紋菊の蒔繪有り、度安四年の作、  
 後西天皇御即位之御道具、明暦二年の作、  
 禁中之御道具、寛文之内裏矣上、付濃梨子地、粒菊唐草、鈕爾案之画様、蝶鳥之画様、此時梅原久音、工を助く、  
 東福門院之中之御道具、画様ハ、粒菊唐草、枝菊、筋菊、其外也、梅原久音、工を助く、



二條光平公之姬君御祝言之道具、東福門院  
之命画標ハ濃梨子地、亀甲崩、内ニ色々の  
紋、上紋ミトマの藤丸  
徳川綱吉公御臺御入奥之道具、濃梨子地、  
桐唐草、鳳凰上紋、牡丹  
靈元天皇御即位之御道具  
綱吉公日光御社参之御道具  
近衛尚嗣公之姬君御祝言之道具、東福門院  
之命濃梨子地、岩菊水机二脚ハ、石山寺の図  
ナリ

鷹司教平公之姬君御入内之道具、濃梨子地  
ニ枝牡丹散、寛文九年、長房五十嵐大兵衛  
共ニ上京一製作  
女院御所之道具、茶碗臺、重箱の類、黒地、菊  
折枝、寛文十年の作  
甲府源綱重侯、二度之御祝言之道具、地紋、越  
中唐草上紋、桐平蒔繪、五十嵐大兵衛工を助  
日光山室物箱之書付  
酒井雅樂頭忠清侯之女御祝言之道具  
藤堂和泉守高久侯之道具、画標、鶴亀松竹



松平權政守頼常侯之道具、織紋色々、上紋、  
水野美作守勝廣侯之道具、唐松、梅、  
土井能登守利房侯之道具、格子織紋、  
嚴有院殿家綱公家綱佛殿并宮殿之蔭繪、麻四枚、濃  
梨子地、織紋色々、  
同勅額門天井板、里地、葵紋、  
高巖院殿廟所之蔭繪、水、蓮、雲、前兩脇梅の  
古木、麻油煙形取色々之繪、柱戸々、濃梨子地、織  
紋色々、  
宣命之箱、关、宸翰心經之箱、外、燒金濃梨子

地葵九散、内、小判濃梨子地、唐土前、梨子、菊  
唐草、金物形、燒金、梨子、御書付文字、金粉繪、延宝  
八年の作、  
燒香机二脚、大小濃梨子地、蓮華唐草上紋、  
葵九散、  
綱吉公より御臺、被進、梯蒔、里地、葵紋、  
内村梨子地、重蒔、里地、芥子葵、内、朱、  
綱吉公より姫君、被進、香蒔、彩溜牡丹葵  
紋、其外女中方、被下の蔭繪、菓子盆、大蒔の類、  
色々、



上野御位牌銘

香箱印籠色々、天和三年徳川氏の命を奉り

山田常嘉と共、製作す

同長故十二世

九

同長故ハ、長房の長子なり、始め長好と稱し、後ハ  
長造又長故と改む、俗稱與惣次郎後、與兵衛と  
改む、寛文元年、生ハ、長房死も、子れよ、家  
と継ぎ扶持方を賜ふ、古の如し、貞享元年、徳  
川綱吉公の姫君鶴子、紀伊中將綱教侯と結婚  
せし時、長好命を奉りて、香棚其の他の諸調度、

27

蔭繪せり、香棚ハ、鉄刀木の本地の上、花丸畫ハ  
葵紋高蔭繪を奉りし、角、終付あり、此の時、菱田甚  
右衛門成信、梅原七郎右衛門重壽、藤田三郎右衛  
門為正等、工と助く、此の婚儀に際し、諸侯より徳  
川氏に奉りし蔭繪の料、紋、硯箱、書棚、重箱、唐蓋、呉  
服箱、火鉢、臺、臺子の類、極め、夥し、此の諸所、弥  
家の製也、所なり、同四年、長好名を改めて、長造  
といふ、元禄元年、長造の一子、清三郎良淑、又ハ、代  
りて、東山天皇御即位の時、用ゐらる、火鉢臺  
ハ、蔭繪せり、此の時、御即位の御調度ハ、入札あり



三  
廿  
六

其の價の廉らるゝもの命せらる。京師の蒔繪師  
春正次郎兵衛茲札し専製作せしといふ。同二  
年日光東照公宮殿の造營あり。長道木よひ古満  
久藏安明、明又匡の二人蒔繪師の頭取となり。奉  
良八郎左衛門貞利、鈴木左衛門正之、栗本太郎  
右衛門茂利、同源左衛門正俊、梅原七郎右衛門重  
壽、園阿弥又五郎武宗、服部庄太夫永貞、野村四郎  
兵衛嘉之壽、おきよ従ひ、日光に往き、蒔繪を不  
在此の行の際、徳川氏より幸阿弥、奉良、古満三  
氏、下とさきし朱印ハ左の如し。

馬三疋、從江戸日光近上下可出之。是若彼  
地、御用、付し、塗師幸阿弥、兵衛、奉良、  
八郎、右衛門、古満之藏、奉候時、一人、一疋  
宛、相渡候者也。

元禄二年五月二日

右宿中

長道、安明、蒔繪し終はりて、宮殿の寄敷居、金  
粉をもち、各其の姓名をふきつゝあり。同年長道  
綱吉公の華蓮持院の額に蒔繪せし額、の長さ、七  
尺三寸、横四尺一寸九分、楯一枚、板あり、裏表晒  
布二通着せ、極上堅地、蠟色塗し、し、文字ハ上々

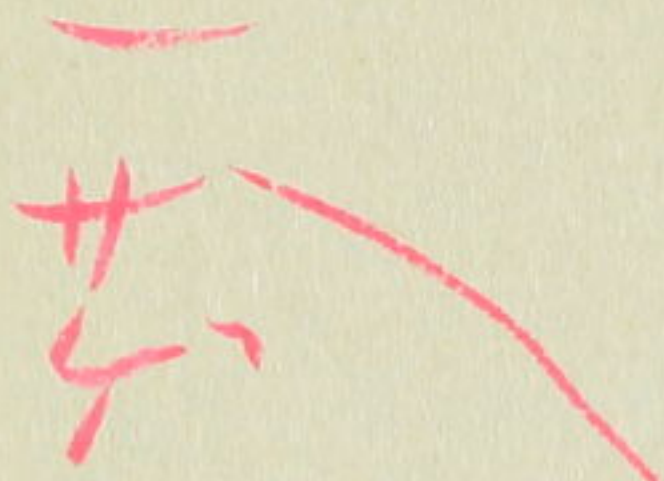


金粉鑲粉打ち研き付着縁に紋菴九十箇を鑲上  
幸をなす地紋牡丹唐草高蔭繪いつ日も焼金小  
判鑲粉上々金粉蔭繪より同三年綱吉公筆大成  
殿の額字に金粉鑲粉を研き付着より額の長さ  
七尺二寸横四尺七分此の時町繪師等同所須弥  
壇十卷の像を粉色せしむ彩色甚拙より一ハ  
徳川氏更ニ長道におも辰本弥左衛門古満久藏  
三人をしておもと漆塗せしむ切粉より工と  
起し僅に二十日間よりして悉皆塗りあきより人  
皆其の成工の迅速より驚く同四年二月柳澤

出羽守保明侯長道を招きて香箱見臺等蔭繪  
せしむ香箱ハ一ハ扇形梅、鶯の画一ハ丸形菊  
折枝に萩の画より見臺ハ青漆塗よりて端々金  
粉研き付着より三月綱吉公柳澤侯の邸に行  
此の時諸侯より公に奉り諸調度ハ香盆書棚  
腰物掛料紙硯箱火鉢屏風の類よりて其の蔭繪  
多くハ幸阿弥家の製より可なり同五年本庄因  
幡半宗資侯長道と呼いて香盆蔭繪せしむ十  
月綱吉公本庄侯の邸に行此の時諸侯より公  
に奉り諸調度ハ杯重箱料紙硯箱重硯箱屏風



の類よりして其の蔭繪ハ亦多くハ幸阿弥家の製  
 止り所なり同六年護國寺觀音堂悉地院の文字  
 綱吉公筆の額ハ蔭繪せり額の長さ五尺五寸横  
 二尺七寸五分其の製大抵後持院の額ハ同ト九  
 月長道名を改めて長故といふ十二月綱吉公再  
 い柳澤侯の邸ニ至り此の時諸侯又蔭繪の諸調  
 度を奉り幸阿弥家の製最多ト同七年綱吉公將  
 老中の邸ニ行へんとし諸侯又蔭繪の諸調度  
 を奉り幸阿弥家の製亦多ト同八年綱吉公ハ五  
 十の筭賀ニ降り長政見臺上蔭繪して奉り同九  
 年



年桂昌院七十の筭賀ハ一杖一蔭繪して奉り  
 此の年屋敷地を賜ふ其の地今詳ならず或享  
 保八年死す年六十三

按長故の製品ハ極めて多し此の頃の蔭繪  
 ありと常憲院時代物と稱し世人の珍重を  
 祈り常憲院ハ綱吉公より幸翠園  
 女院御所御几帳 夏冬二通濃梨子地 菊折  
 杖

近衛基照公之姫君甲府参議綱豊侯之室御祝  
 言之道具 幸物 綱代画標 桐 鳳凰 葛菟葵



廿五

紋、枝牡丹

綱吉公御膳道具、朱塗、葵紋

同御祝御膳道具、濃梨子地、葵紋、高蔭繪

同御精進御膳道具、地紋松葉散、葵紋、総朱

御臺御膳道具、濃梨子地、葵紋、枝牡丹

鶴姫君御膳道具、濃梨子地、葵紋、枝牡丹、高蔭繪

御臺御眞紋臺、濃梨子地、亀甲織紋、枝牡丹

高蔭繪、金具入、内裏、濃梨子地

御臺御櫛三

鶴姫君香合二、一ハ杉溜大、高蔭繪、一ハ黒地

鳳凰研出

酒井河内守忠明侯之息女御祝言之御道具

画様ハ花輪造ハ織紋上、油煙形取、内ハ色々

繪盡

同次女御祝言之道具、画様ハ菊、立木、松、岸

雲

鶴姫君、紀州御入傳之道具、香棚、小道具ハガ

やさん、本地の上ハ花丸盡、葵紋、高蔭繪、角小

付、貞享元年の作

31



廿五

土井周防守利益侯長女御祝言之道具、里地、  
岩岸松梅、貞享四年の作

御火鉢臺一、元禄元年東山天皇御即位の時、  
用よりしもの、典兵衛長道名代、幸阿弥清三  
郎良淑作

日光御宮御佛殿、御造管塗師蒔繪一式、元禄  
二年長道外丸人

獲持院之額文字、綱吉公筆、元禄三年長道作、  
文字、金粉鑲粉打研付、縁、葵丸十、錆上ヶ地、  
牡丹唐草高蒔繪、燒金小判、鑲粉上ヶ金粉蒔繪

と形上ヶ、金粉研付

大成殿之額文字、綱吉公筆、文字の上ヶ、金粉  
鑲粉研付

八重姫君御下向諸道具、黒塗、葵丸枝牡丹  
葵紋地紋松葉散

棚香箱一、総地縮妻織紋上ヶ、菊折枝内梨子  
地、元禄五年紀州侯より綱吉公に奉る

智足院經堂之額、文字式切煙織、黒塗文字、  
端上ヶ、金粉研付、金物塗込

護國寺觀音堂之額、文字悉地院綱吉公筆、元

22



三十一

禄六年の作、狩繪大抵、智足院の類に同じ、  
香合、黒地、蓋の上、くづや松月、雲、廻り、桐妻  
織紋葵丸研出し、内裏焼金濃梨子地、網吉公、  
奉、

同二、一ハ、ハッ橋の画、内外共焼金濃梨子地、  
一ハ、色紙金具、内外共焼金濃梨子地、同上  
同二、画様今詳ならず、

鶴姫君、紀州御入興、付、諸侯より、徳川氏に  
奉り、狩繪の諸道具の中、幸阿弥製、  
左の如し、

重箱五組、

榊原虎之助勝兼

内、二ハ、濃梨子地、葵紋、三ハ、饒蕪葉丸、  
棟棠、

同五組、

本多中務大輔政武

内、二ハ、濃梨子地、葵紋、三ハ、黒地、若松、  
橘、

同十組、

松平丹後守光茂

内、四ハ、濃梨子地、葵紋、藤、熊笹、五ハ、黒地、葵  
紋、菊、梅、若松、牡丹、一ハ、辛夷地紋、

同三組、

真田伊豆守信房



同二荷、  
 火鉢臺四、  
 皆里地、地紋唐草、葵地、  
 同四、  
 葵紋面之内唐草、  
 料紙硯箱二、  
 里地一、八簾梅一、布引瓶、  
 書棚一、  
 濃梨子地、葵紋、  
 廣蓋十枚、  
 户田肥後守氏包  
 松平下總守忠弘  
 上杉彈正大弼綱憲  
 松平越中守重定  
 佐竹右京大夫義處  
 松平相模守光仲

皆濃梨子地、芍藥鉄蕉竹雀  
 同三組、  
 阿部對馬守正森  
 皆濃梨子地、若松、梅、若竹、菊水、  
 同二組、  
 牧野駿河守忠卿  
 皆濃梨子地、竹、長春松、櫻、  
 手水手洗二、  
 酒井十五郎忠直  
 皆里地純子紋織崩、菱の内色、  
 手拭掛二、  
 同  
 皆里地、海松貝、  
 吳服箱三荷、  
 酒井河内守忠明



黒塗臺子一筋

安藤對馬守重治

元祿四年綱吉公柳澤侯之邸一御成之付諸侯より公に奉り藤繪の諸道具の中幸阿弥家製より所左の如し

香箱三

柳澤出羽守保明

一ハ扇形梅、鶯一ハ桃形一ハ丸形相口菊折枝、萩

見臺一

同

青漆塗唐戸面端々上々金粉研付注懸書棚一  
上杉彈正大弼綱憲

腰物掛二

堀田下総守正中

一ハ梨子地、唐草一ハ里地、若松火鉢臺三  
松平信濃守綱茂

栗本地、唐草

料紙硯箱

安藤對馬守重孝

里地、岩岸鶴若松内、梨子地竹垣、梅、簾屏風一雙  
佐竹右京大夫義彪

縁黒塗

屏風二雙

松平薩摩守綱貴

縁黒塗



香盆二

幸阿弥長道

一ハ、菱形、一ハ、丸形、

天禄五年綱吉公本庄侯之邸へ御成に付、諸侯より公に奉りし蒔繪の諸道具の中、幸阿弥家製より所左の如し、

香盆二

本庄因幡守宗資

唐木若松高蒔繪

料紙硯箱

6 梨子地

松平伊豫守綱政

盃百枚

鳥居播磨守忠近

朱、全粉汰懸

簾屏風一雙

6 椽墨塗

真田伊豆守信房

重硯箱五重二組

鉄牛和尚

桐春度櫻花散蒔繪、全粉汰懸

茶碗

幸阿弥長道

高原焼葵紋付

元禄六年綱吉公再び柳澤侯之邸へ御成に付、諸侯より公に奉りし蒔繪の諸道具の中、幸阿弥家製より所左の如し、

料紙硯箱一

佐竹修理大夫義林

濃梨子地、岩岸若松、鶴、内梨子地、竹垣、梅



同

堀田下總守正中

濃梨子地、岩岸梅、若松、内、梨子地、長春、筵

硯箱

久留島信濃守道清

里地、岩岸、松鶴、芦内、梨子地、岩岸、若松

重箱二組

秋月長門守種政

書棚一

松平薩摩守綱貞

内外、梨子地、岩、水浪

料紙硯箱一

同

濃梨子地、若竹、橘、内、梨子地、岩岸、萩

腰物掛二

松平齋宮信通

唐木一、唐草一、若松

重硯箱十重二組

同

薄梨子地、櫻折枝、内、梨子地

重硯箱十重三組

小出播磨守英長

薄梨子地、梅折枝、内、梨子地

硯箱一

中川佐渡守久恒

里地、鶴、内、梨子地、若松

貝臺一

上杉輝正大弼綱憲

総、梨子地、岩岸、若松

繪硯箱一

松平下總守忠弘



中梨子地、花丸色々、内濃梨子地、

火鉢臺三、松平伯耆守綱清

桑木地、全粉汰懸

腰物掛二、松平越中守定重

濃梨子地、葵紋、古梨子地、若松、

香盆三、淺野内匠頭長矩

一八濃梨子地、松、一八、古梨子地、水仙、

一八唐木、若松、

火鉢臺、内藤能登守義孝

桑木地、全粉汰懸

重箱二組、同

御次見臺一、溜塗、五島兵部口口口

錫棗十、同

朱塗膳櫃五十人前、鍋島紀伊守直頼

同、酒井河内守忠舉

御次見臺二、春度塗、大久保大膳正忠易

朱塗膳櫃三百人前、松平左膳忠雅

同百人前、戸田采女正氏定

火鉢臺五、松平土佐守豊高

桑木地、全粉汰懸



薄板一枚

石川主水綱茂

書棚一

藤堂和泉守高久

黒地、燒金むら平目、岩岸若松梅

唐蓋五枚

小笠原遠江守忠雅

香盆十、繪株色々

京極備中守高豊

硯文臺

松平肥前守綱政

濃紫子地、八橋内、梨子地、梅

貝臺一

同

黒地、段忠菴竹、研出、内濃紫子地

香盆一

阿部對馬守正森

菊折枝、石疊金貝

沉箱一

同

黒地、櫻、水内、梨子地

綱掛臺子一、餅

松平土佐守豊昌

総むら梨子地

廣蓋三、入斗子

酒井阿内守忠義

内外燒金平目、松、櫻、菊

短丹箱一

阿部伊豫守正春

二軸盆一

北野佐渡守茂成

燒金平目、梅、塚堆朱彫物



三才

繪硯箱一

永井近江守直只

里地燒金平目むら

蓬萊内梨子地

葦臺一對

松平陸奥守綱村

唐木裏梨子地

砂物銚臺一

松平修理大夫吉貴

唐木金粉次懸

卓一

松平隱岐守定直

里地天井と足懸の間織紋

料紙硯箱一

榊原式部大夫勝乘

燒金平目松島岩岸水内梨子地紫陽花

冠臺一

松平淡路守綱矩

濃梨子地岩岸若松

十炷香箱一

松平伊豫守綱政

里地櫻紅葉内梨子地

腰物掛二

松平左膳忠雅

濃梨子地葵紋一八木地唐木葉唐草

香棚一

松平薩摩守綱貴

里地岩岸若松内梨子地

料紙硯箱一

同

燒金平目芳野山内梨子地



三

硯文臺一

本多下野守忠恭

燒金平目、如歌浦内、梨子地、若松

火鉢臺三

松平周防守康贊

柔木、金粉、汰懸

一軸盒一

松平米女口口

燒金平目、瀧山水、縁織紋

火鉢臺二

松平若狭守直明

柔木、金粉、汰懸

火鉢臺二

松平左膳忠雅

柔木地、春慶、唐松、唐草

同

同

柔木地、春慶、笹葉、唐草

書棚一

幸阿弥長放 長道改

柔木地、扇子、鑄上、高藤繪

鞆一

同

黑塗葵紋、金貝内、濃梨子地

棗一對

同

濃梨子地、葵丸、金貝

二軸盒一

家老用人

柔木地、松、唐草



腰物掛二 被仰付 山城守忠昌

梨子地、葵紋、木地、唐松、唐草

卓一 同

赤木地、筵、唐草 同

一軸盆一 同

島桐、白木上、若松、蔴繪

二軸盆一 同

島桐、若竹、蔴繪

香盆二 同

梨子地、梅松、筵、蔴繪

三  
廿

繪硯箱一 同

薄梨子地、水、鶴内、梨子地

御次見臺二、溜塗 同

棗一對 同

濃梨子地、葵九全具

繪硯箱一 被仰付 相模守正直

薄梨子地、長春、若竹、内、梨子地

元禄八年綱吉公五十之筭賀、付、諸侯より

奉り、蔴繪の諸道具の中、幸阿弥家製より  
所左の如し



机一脚

松平修理大夫吉貴

燒金むら掣子地、八橋高蒔繪

重箱一組

南部信濃守行信

里地、風車

香盆一

同

里地、若松

貝臺

松平右京大夫輝定

幸本地、改懸唐草

繪硯箱一

保科肥後守正信

元禄九年桂昌院殿七十の筆賀、付奉

杖

幸阿彌長放

桑木地、頭作物、頭上々粉研付、若松木口、二、  
の蒔繪、石付、銀金物

幸阿彌家系圖

道長

土岐口郎左衛門入道幸阿彌、文明十  
年十月十三日、死、年七十一、法名宗月

道清

藤左衛門入道法橋道長の長子、  
明應九年十月三日、死、年二十

宗全

法橋道清の子、大永七年、  
十月十三日、死、年七十一、法名宗月

宗正

宗全の子、天文廿二  
年十月十三日、死、年七十一



64

一  
サ  
シ

按：幸阿弥家ハ、美濃の名族土政氏の支族ニ  
シテ、薛繪を以テ足利、織田、豊臣、徳川の四氏ニ  
仕、俸禄を賜ひ米地を賜ひ、又屋敷地を賜ひ、  
傳へテ徳川氏の末年ニ至リ、其の家世ヤ、天  
皇御即位の御調度ニ薛繪を以テ、格式固

長孝 一、長好、正峰の嫡孫、  
長周  
長輝  
長行 長輝の長子、  
長賢 長輝の次子、

宗伯 法橋宗全の次子、弘治三年  
長清 十月十日、左衛門入道、  
長晏 十月十日、左衛門入道、  
長善 十月十日、左衛門入道、  
長法 十月十日、左衛門入道、  
長重 十月十日、左衛門入道、  
長房 十月十日、左衛門入道、  
長叔 十月十日、左衛門入道、  
正峰 十月十日、左衛門入道、  
道該 十月十日、左衛門入道、



より賤しうも徳川氏の時ニ當りてハ御蔭  
繪師數人の上ニ座シ工人を指揮して蔭繪師  
の棟梁たりとて其の蔭繪ハ專土佐家の  
下画を用ひ又狩野家の下画をも用ひて品位  
高尚舞妓優美なり直ニ蔭繪の本流と稱す  
しナリハ自稱して本蔭繪といひ民間の蔭繪  
を目して町蔭繪と呼ひ其を卑し自いふ世  
々の天皇御即位の御調度を製す家方見ハ  
濫ニ民間の需めニ應ニ蔭繪を製す事と能  
はざり其の見識既ニ此の如くあるハ其の製

451  
作す所亦自一見識ありて高尚の技をある  
にせり其の美術鑑賞家々足利時代常徳院時  
代と稱し貴重なる所の蔭繪ハ多くハ幸阿弥  
家の製す所なり盛なりといふ一ト也  
後年町蔭繪の一派を夫悦天琳古満破笠の  
諸流行ハきて幸阿弥の本流大ニ衰へ本蔭繪  
の工人既ニ絶えんとし隨ひて本蔭繪の調度  
世ニ存する甚稀なり至り嘆ましくさなり







